

## 2015年度教師海外研修(エルサルバドル) 研修報告書

学校名	名古屋市立表山小学校	氏名	大島 風花
-----	------------	----	-------

### 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

#### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は昨年度、開発教育指導者研修に参加し、5年生の子どもに総合的な学習の時間を使って開発教育を行った。しかし、子どもの中に「途上国の人はいかかわいそう」という気持ちが大きく残っているように感じた。今年度、持ち上がりの6年生を担当する私が教師海外研修に参加した目的は、途上国に住んでいるからといって、彼らがかわいそう、不幸なわけでは決してなく、むしろ彼らは私たちが忘れかけているものを大切にしていたり、それぞれに楽しいことがあったり、幸せに思ったりすることがあるということを感じてほしかったためであり、そのためには現地研修で生の教材を多く集める必要があった。エルサルバドルにおいて、何よりも家族を大切にしていたり、目が合えば笑顔で挨拶してくれたりする人々と直接触れ合うことができ、現地研修の目的は果たすことができたと思う。私が実際に見てきた彼らの様子や言葉を伝えることで、子どもが自分の大切なものや「豊かさ」について、さらには自分ができることについて考える機会にしたい。

### 2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

#### (1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

エルサルバドル＝中米＝ラテン＝陽気と思っていたが、意外にもエルサルバドル人はシャイ。でも、目が合うとにっこりはにかんで笑ってくれる。そして、「中米の日本」と言われるほど勤勉。確かに暇そうに座ったりしている人を街中であまり見かけなかった。地球の裏側の国を、一気に身近に感じた。

そして、エルサルバドル人が口々に「もう食べたか？」と聞いてくるほどの伝統食、ププサ！なかなか食べる機会がなく、やっと食べたのはホームステイ先の次男のププサを奪って一口。日本のおやきのようなもの。スチトトで最高の景色を見ながら手作りしたププサもおいしく、教えてもらってみんなで歌った通り、「ププサ大好き！」になった。

一番心に残ったのは、家族を思う気持ち。自分の家で寝ることが1番だから、例え大学まで片道2時間も家から通う。家族1番の優先順位という価値観が当たり前のエルサルバドルの人々に、日本で忘れられかけていることを教えてもらった気がした。

#### (2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

驚いたのは、エルサルバドルはこんなに離れているのに、日本と同じ環太平洋造山帯に属しているということ。ということは、地震が多い。同じ地球に暮らしているんだなと実感した。日本はこれまで地震という天災に悩み、対策を行ってきたが、エルサルバドルも同じように困っている。日本が培ったこれまでの知見が、エルサルバドル流の方法に変えて、現地で生かされていた。

意外な共通点の2つ目は、伝統文化の藍染め。私の住む名古屋市緑区にも有松鳴海絞りがあり、興味がわいた。エルサルバドルでは、19世紀末ドイツでの化学染料開発により伝統が途絶えてしまったが、同じ伝統文化をもつ日本の技術者が指導をし、再開された。伝統文化を大切にしたい気持ちは同じだと感じた。

物質的なつながりでは、街中を走る日本メーカーの車。そしてエルサルバドルは、近年の日本のコーヒー

輸入国 7～11 位。コーヒー研究所では、異常気象やカビの病気に悩まされながらも、品種改良をくり返し、コーヒーを生産し続けてくれているその努力のおかげで、自分たちもコーヒーが飲めるんだと感謝の気持ちをもった。

### **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

スチトの語学学校の先生方に、内戦についての話をきくことができた。とても辛いお話で申し訳なかったが、お聞きすべきことだったので質問してよかった。「スチトの人口は内戦によって 4 万人から 8 千人に減り、その方の家族は様々な理由から全員いなくなってしまう。皆それぞれに辛い思い出があるが、今は戻ってきた家族もあり、辛いことがあっても神の御加護での乗り越えてきた」とのことだった。年配の先生のお話を聞いて、若い先生は「絶対にもうそんなことは起こしたくない。体験していないので、本当の辛さがわからないことが残念だ」と言っていた。エルサルバドルにも日本にも内戦・戦争の爪痕があり、それを若い世代が引き継いでいき、同じことを繰り返さないようにしなければいけないというのも、共通の課題であると思う。また、頻繁に起こる天災、異常気象も共通の課題だ。子どもと何について一緒に考えるか、まだ悩んでいる。

### **3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

「建物耐震技術の向上・普及」在外補完研修では、低所得者が自ら耐震性を備えた家を建てられるよう、従来から使われていた日干しレンガの構造に、簡単に手に入る竹のような資材を加えて、耐震性を増していた。「耐震技術の筋道・やり方を教え、日本は必要なときに助言を与える」というお話にもあるように、日本のやり方を押し付け、日本人が去ったらその後の問題に対応できなかつたり、更なる成長がなかつたりしたら意味がない。現地のこれまでのやり方、現地の資源・人材、現地の人々がその後自分たちで持続・発展していける方法を理解した上で、日本の知見を活かして課題解決の方法を共に考えるという支援の仕方に、現地の人々のことが最優先に考えられているなど感動した。各地で拝見した青年海外協力隊の方の活動も同じだった。

JICA の専門家の方が「世界で日本人が活躍することは、日本を活気づける」とおっしゃっていて、青年海外協力隊の方も「子どもたちに世界に目を向けてほしい」とおっしゃる方が多かった。子どもたちが世界を見られる機会を実際に与えられるような、そんなプロジェクトがあったらいいなと思う。

### **4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」**

※別掲

## 5. 印象に残る写真2点 とその解説

### ●写真1… [BAN\_3820]

◇キャプション： スチトの語学学校のみなさんと

◇解説文：選んだ理由は、内戦の爪痕についてネルソン先生や若い先生方にお聞きできたから。「悲しい話ばかりで思い出すのも辛い」というお話。内戦・戦争は、2度と起こしたくないという同じ思いを若い先生方と共にできた。



### ●写真2… [BAN\_4106]

◇キャプション：宝物のピアス

◇解説文：日本文化体験を行った小学校。私の左の子が別れ際、持っていたピアスをくれた。その時限りの出会いで、自分の思いを相手に伝えることって難しいのに、それができる子が多い。私もつけていたピアスをあげて交換成立！



## 6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

カメラは撮りすぎない方がいいと思いました。通訳の方から、写真を撮ることばかりに気をとられず、その場所のその時を思いっきり楽しんだ方がよいと最後に話していただきました。日本に帰って、教材に使いたいのにあの写真がない！という状況になりたくないがために、私も必要以上に写真やビデオを撮りました。が、毎日カメラ係、ビデオ係、ファシリテーターの方が撮ってくださるので、マニアックで自分しか見ていないような所以外は他の人にお任せして、その時を自分の目と心に焼き付けてくるくらいの勢いで楽しんできた方がよかったなと思いました。その分、カメラ・ビデオ係の人は、責任を持って残さず撮る必要はあると思います。

## 7. その他全般を通じての感想・意見など

この研修報告書を書いている途中に、第3回開発教育指導者研修があり、北海道のJICAに勤めてみえるエルサルバドル青年海外協力隊経験者の方にお話を聞く機会があった。現地で長い間暮らさないと分からない、出口の見えない国の状況をお聞きして、ショックを受けた。頑張っても、正しいことをしても、それが報われない国の体制。私が9日間現地で感じたことは、短い期間だからのことだと感じたが、それが私の感じたことなので、報告書は直さないことにした。私の感じたことを子どもたちに伝えたいと思う。また、現地で長く暮らしてみたいと思った。

以上